

会員研究

中世以降の征夷大將軍は有名無実

加藤 導男

はじめに

昨年十二月の例会で「坂上田村麻呂」について研究発表させていただいた。

これまで、中世史を主体にやってきましたが、図書館ではこの関係の書籍は意外と少なく、会員の方より参考文献を数冊お送り頂き、また、昨秋、松尾光先生より新刊書『鬪乱の日本古代史』をご恵贈頂いて、大変参考になり発表に漕ぎ付けました。この紙上をお借りして御礼申し上げます。

古代から近世までの征夷大將軍の実態を調べ、投稿しました。

一、蝦夷(えみし)について

征夷大將軍は、蝦夷討伐の為に設けられたものなので、前記の発表時にも述べたのですが、少し詳しく説明します。

そもそも、蝦夷は華夷思想(中

華思想)から発生したものだ。

華夷思想は中国で起こり、朝鮮半島に伝えられ、七世紀頃に日本に伝来したものです。

日本では中央政権(中国では天子)を最高位のもので、辺境の東西南北に住む民族を蔑視し、東夷(とうい)・西戎(せいじゆう)・南蛮(なんばん)・北狄(ほくてき)と呼称し、東夷は「東北以北に居住する一段階下の異民族」としたものである。

古来より、蝦夷は「エミシ」「エビス」、それ以前は毛人「エミシ」とも呼ばれていたのである。

先住民に対する蔑称であると思われるが、蝦夷の名は国家が呼称したもので、蝦夷の一族が自称したものではない(蝦夷は海老のように腰の曲がった醜い野蛮人の意味合いがあり、国家に容易に服属しない「まつろわぬ

民」であったからとする)。

次の項でも述べますが、蝦夷の族長で武名を馳せたアテルイは正式な名は、大墓公阿豆流(たものきみあてりい)為。

和同三年(七一〇)四月、為政者は陸奥国の蝦夷族長らに対して「君の姓を賜はりて編戸に同じくせむことを許した」(『続日本紀』)。

「編戸」とは、戸籍・計帳に登載されて口分田を与えられ、租・庸・調など租税や労役を負う公民を指す言葉で、公民化を願った蝦夷族長クラスの住民に対し、君(きみ)姓(本拠地の地名に君のカバネを与えて、公民に準じた待遇を保障しようとしたものであった)を与えたのである。

ちなみに、君姓は蝦夷族長が名乗る姓として制度化される。君姓は七五九年十月、「君姓」から「公姓(きみせい)」に改められた。

「大墓公」の「大墓」は、古代の胆沢(岩手県奥州市水沢区)をアテルイが本拠とした、田茂山(たもやま)からとったものと思われる。

このことからして、アテルイの父の代には、一旦は律令国家に服属していたものとされているのです。

二、平安時代の征夷大將軍

八世紀から九世紀初頭にかけての二十五年ほどの桓武天皇の治世を要約すると「軍事と造作」(『日本後紀』)といえる。「造作」とは平城京から長岡京・平安京への二度の遷都であり、「軍事」とは東北地方への蝦夷征討である。

蝦夷征討は桓武朝で突如起こったことではなく、記録に残る国家と蝦夷の争乱は奈良時代から起きており、養老四年(七二〇)、陸奥で起きた反乱は空前の規模であったと言われている。

直後の神龜元年(七二四)に多賀城が創建され、鎮兵の統括機関として鎮守府が併設された。こうした政策が功を奏して、五十年間程は平穏な時代であった。

桓武天皇即位の前年の宝龜十一年(七八〇)、伊治公岩麻呂(これはのきみあさまろ)

は突如として反乱を起こす。磐麻呂はもともと蝦夷の族長であり、中央政府の同化政策に従い、多くの蝦夷を率い、服属していた。しかし陸奥国按察使(あぜち)の紀広純や道嶋大盾等との折合いが悪く、多賀城を襲撃したのである。

中央政府は鎮圧軍を派遣するも、戦果は上がらず、磐麻呂の行方は判らずじまいとなった。

胆沢地方を中心とした国家と蝦夷の攻防は宝龜七年(七七六)以降、実に二十数年を要した。鎮圧の軍勢を差し向ける国家側は、兵力に劣る蝦夷軍に、いずれも失敗に終わっていたのであった。

坂上田村麻呂は、征夷大將軍の相伴弟麻呂の同副使に任命され、十万人の大規模な軍容で進攻し、指揮官の能力を認められ、延暦十五年(七九六)十一月、征夷大將軍に任ぜられた。

その後、延暦二十年(八〇一)、田村麻呂は四万の軍勢を率いて胆沢から志波(岩手県盛岡市)にかけほぼ制圧したのである。

田村麻呂はただ武力で制圧するのではなく、平和的共存を造

りだすことに腐心し、蝦夷達的生活安定に尽力したのであった。

翌年の延暦二十一年(八〇二)四月、蝦夷族長・アテルイと同副将のモレは、同族五百人を引き連れ、田村麻呂に投降してきただのである。

同年七月、アテルイ等は田村麻呂に伴われ、入京する。

田村麻呂は朝廷に「故郷に返り、蝦夷社会の統治業務に活用したい」と申入れ、助命嘆願したが、公卿達は「彼らは獣心で、もし奥地に赦して返せば、虎を養つて野に放つようなもので、患いを遺すようなもの」として、アテルイとモレの二人を河内杜山で処刑させたのである。

弘仁二年(八一二)には、文室綿麻呂(ふんやのわたまる)が征夷大將軍に任命された。

その後、蝦夷との争乱は各地で行われ、元慶二年(八七八)に出羽秋田城下等で戦鬪を繰り広げた。元慶の乱こそ大規模であったが、あとはさしたる組織的な戦鬪はなく、阿豆流為との戦いで終わったようである。

松尾光先生の著書『鬪乱の日本古代史』のなかで「それにし

ても、蝦夷側はなぜ国家を樹立しなかったのか」と述べておられる。

蝦夷は海側に暮らす一族と、山側に暮らす一族があり、山側の一族は狩猟民であって、いざ国家側と戦鬪となった場合は、馬を蹴つて、強力な戦力となつた様である。

数十年の間、五万、十万の兵力で国家側が攻めても、その都度勝利をおさめた蝦夷の潜在的な力があれば、別の対抗する国家の樹立も可能であったかと同感できます。

そして事典等で『征夷大將軍』と検索すると、十名程出てくるが、征東使・征夷使・持節征東將軍等も含まれるので、前述の通り実際の征夷大將軍は相伴弟麻呂・坂上田村麻呂・文室綿麻呂の三人といつてよいと思われる。以後述べる。

中世以降の征夷大將軍と違い、大軍で蝦夷を攻める場合に天皇より任命を授けて、その任にあたるもので、恒常的な地位ではなかつたと思われる。

昭和二十五年、中尊寺金色堂の藤原四代の木乃伊(みいら)

を解剖し、分析された。蝦夷の血を引くとも言われ、安倍氏流れをくむ藤原四代はアイヌとの関係もあるやと社会の注目を浴びた。身長・頭骨・指紋等アイヌのものとは合致しなかつたと言われた。

三、中世以降の征夷大將軍

平安時代に文室綿麻呂が征夷大將軍に任命されてから三七〇年余経つた源平合戦の初期、木曾(源義仲(源頼朝・義経の従兄弟))は、平氏打倒の令旨により挙兵。俱利伽羅峠の戦いで平氏の軍を破り、入京する。

連年の飢饉と荒廃した都の回復を期待されたが、治安の悪化も収まらず、後白河法皇との仲も悪化した。強引にも征夷大將軍の座を勝ち取った。ただし九日後に頼朝の命令による源範頼・義経によって、討ち取られる。この征夷大將軍は法皇の陰謀で、頼朝を討てとの内示があつたとする説もある。

義仲が征夷大將軍に任ぜられたことについて、私が所蔵の『吾妻鏡』の壽永三年の処に、頼朝が述べていることが載っている。

「伊予守義仲、征夷大將軍を兼ねると云々。(中略)桓武天皇の御宇、按察使兼陸奥守坂上田村麻呂卿を補せらるるなり、(中略)希代の朝恩なり」とあり、以後、源氏が勝利した後、頼朝は後白河法皇に征夷大將軍の就任を再三願ひでも、叶わず。法皇崩御後の建久八年(一一九二年)に征夷大將軍に任ぜられたのである。三百年以上も前に蝦夷の叛乱が終わっているのに、何故この職名を欲していたのか。

以後、鎌倉幕府歴代將軍、同じく室町幕府、江戸幕府の歴代の武家將軍は、何故か蝦夷討伐はとつくに意味のないことでありながら、権威的な意味合いをこめて征夷大將軍を名乗っている。これは、いかに坂上田村麻呂の征夷大將軍が偉大であった事を証明するものである。

【参考文献】

「征夷大將軍」

高橋富雄

中公新書

「關乱の日本古代史」

松尾光

花鳥社

「奥州藤原氏」

高橋崇

中公新書
「人物叢書 坂上田村麻呂」

高橋崇

「阿豆流為」

吉川弘文館

「吾妻鏡」

樋口知志

ミネルヴァ書房

貴志正造

新人物往来社

昨年十二月の研究発表の際に少々述べたのですが、桓武天皇(実母の高野新笠が百濟系)、坂上田村麻呂(十二代前が漢高祖皇帝)が渡来系であることで、当方が五十年程前に、銀行の飯能支店の開設をした際のことを思い出しました。

飯能市の隣の日高町(現日高市)に高麗川や高麗神社があり、この神社の古老の方より、飯能の地名は朝鮮語「ハンナーラ」が由来と聞きました。

ネットでしらべると、飯能市と日高市の青年会議所で『ほんなら』という情報誌を発行しているの、電話を架けたところ、飯能の地名は、高句麗が日本に逃れ、この地に住むよう

になり、朝鮮語の「ハンナーラ」から出来たことが確認できました。

そして、その意味は「広い部落・町」ということであり、発表時に言いそびれたのですが、ゲストの女性の方より発表が終わった際に聞かれましたので、この際に追記させていただきます。

(完)

